

「日本民俗学の父」と呼ばれた柳田国男の随筆に、「親棄山」という戦時中に執筆された作品があります。これは、いわゆる口減らしのために、やむを得ず親を山に棄てに行くという「姥捨て山」の昔話を紹介し、それについて論じた内容となっています。

たとえば、ある男が六十歳になった親を畚（もっこ）に入れ、幼い息子に片棒をかっがせて、山の奥へ棄てに行くという話があります。親を山へ置いた後、男は用済みになった畚もそこに置いて帰ろうとしますが、息子が「これは家へ持って帰りましょう。いずれまた必要になるから」と言います。その言葉に我に返った男は、親を連れ帰ったという話です。

その他、「灰で縄をなう」「打たずに太鼓を鳴らす」などの無理難題を親の知恵によって解き、難を逃れたり、幸福を得たりといった話が紹介されています。

「親棄山」という題名から受けるショッキングな印象とは逆に、この柳田の作品では、「親を大切にすること」が主題となっています。「親孝行」の大切さを感じさせるような話がいくつも紹介されているのです。

このように、親をはじめ、私たちが生きている元となる存在に思いを馳せ、感謝の思いを深めることは、実は、私たちが生きる力を得て、困難を乗り越え、充実した人生を切り開く上でも大切なことです。

たとえば、親や祖先のおかげで「自分は生かされている」という気持ちが高まると、人はその対象との「つながりの意識」が強



## 親の献身的な愛情を自覚した時 困難に立ち向かう力が沸き立つ

化されます。この一体感が強まれば強まる程、幸福度は増し、孤独感に苛まれることを防げるでしょう。

また、「感謝すること」は、自分自身の人生を主体的に生きることにもつながります。不都合な出来事を他人や時代や景気のせいにしては限らず、主役はそちら側にありません。そうではなく、日々生じる苦しさの中にも「感謝できること」を見出そうとする営みは、脇役の生き方から脱して主役の地位を取り戻す端緒となるのです。

さらに「有難い」という感謝の思いは、様々な活動の原動力になります。日々の働き（仕事）は、その表現に他なりません。感謝の思いの質と量に応じて、働きのあり方も変わってくるはずですが。

さて、先の「親棄山」には、自分を山に捨てる息子が帰り道に迷わないよう気遣う母親の歌が紹介されています。

奥山にしおる葉は誰のため 身をかき分けて  
生める子のため

「しおる葉」とは、山道の左右の木の小枝を折って目印にするという意味です。棄てられるわが身よりも息子の帰路の無事を案ずる母の思いが伝わってきます。

私たちは、このような親の献身によって生み出され、生かされてきました。辛いこと、苦しいこと、矛盾や理不尽に打ちめされそうになっても、この親の思いを胸に抱いて、勇敢に、自らが直面する課題に取り組んでいきたいものです。